

令和元年5月25日現在

機関番号：34310

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07236

研究課題名（和文）15世紀北イタリア諸宮廷における葬礼美術に関する研究

研究課題名（英文）A Study Concerning Funeral Arts in Northern Italian Courts during the Fifteenth Century

研究代表者

小松原 郁（Komatsubara, Aya）

同志社大学・研究開発推進機構・助手

研究者番号：20803125

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、北イタリアの諸宮廷において15世紀に制作された葬礼美術、とりわけリミニやミラノで制作された墓碑や墓廟聖堂の図像の特質とその社会的背景を明らかにするため、君主の墓碑および墓廟聖堂装飾の調査及び図像分析を行った。特にリミニのマラテスタ家墓廟、サン・フランチェスコ聖堂（通称テンピオ・マラステイアーノ）の装飾に着目し、聖堂内の墓碑と装飾図像を家系の記憶の形成という観点から再考することで、葬礼美術の系譜の中に位置づけた。またそれによって、15世紀後半の北イタリアの葬礼美術の図像の特徴及び図像構想における都市間の相互刺激、君主間の政治的関係の墓碑墓廟の造形への影響を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

北イタリアの諸宮廷において15世紀に制作された葬礼美術、とりわけリミニやミラノで制作された墓碑や墓廟聖堂の図像を調査、分析することで、15世紀後半の北イタリアの葬礼美術の図像の特徴及び図像構想における都市間の相互刺激、君主間の政治的関係の墓碑墓廟の造形への影響を明らかにし、15世紀イタリアの宮廷美術の全体像を補完することができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research analyzed the iconography of tombs and decorative styles of mausoleum churches as ordered by the rulers of Northern Italian cities (e.g., Rimini and Milan) to clarify the peculiarity of their images and their social background. In particular, we focused on the church of San Francesco in Rimini known as Tempio Malatestiano, the family mausoleum of the Malatesta paying particular concern to the way of visualizing family memories. Based on the investigation in Italy, and analysis of the associated images, this study testified to the reciprocal influence of patronage between cities and the effects of political relationships vis-a-vis the concept of figurative images.

研究分野：西洋美術史

キーワード：西洋美術史 ルネサンス イタリア 宮廷美術

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

君主制都市国家が乱立していた 15 世紀の北イタリアでは、君主の注文により世俗作品が多く制作され、それらが各都市の文化を形成し極めて豊かな図像体系を創り出していた。そのため北イタリア宮廷美術研究は、都市ごとに地域性を重視した研究が進められてきた。また君主たちは古代文化への関心を強く持っていたため、先行研究では政治権力と図像の関係や、パトロンの趣味の反映としての古代受容の観点から作品を読み解くことに主眼が置かれている。都市間の美術を横断的に分析する場合も、凱旋や占星術に関する図像など古代文化との関連が非常に明白な分野に焦点が当てられてきた。その一方で、葬礼文化についてはあまり着目されず、芸術性の際立った作品が単一的に取り上げられたり、各都市の美術史の一部で触れられる傾向にあり、体系的な論考に乏しい。

墓碑についての重要な先行研究としては、中部イタリアのフィレンツェで 14~16 世紀に作られた墓碑の分類と社会学的な観点からの調査研究(Butterfield, A. (1994) "Social structure and the typology of funerary monuments in early Renaissance Florence," *Res*, XXVI, Autumn, pp. 47-68 など)や、イタリアの騎馬像型など特殊な形式の墓碑についての論考(Wegener, W. J. (1989) *Mortuary chapels of renaissance 'condottieri'*, PhD diss., Princeton University.)があるが、先行研究では、北イタリアの宮廷文化という地域性、時代性を考慮した調査は不十分である。

そのため、北イタリアの宮廷文化の全体像をより明確にし、西欧の墓碑墓廟の通史的研究を補完するために、15 世紀北イタリア諸宮廷の葬礼美術に着目し、その図像の特質と社会的背景を明らかにすることを課題とした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、リミニ、ミラノの宮廷で 15 世紀に制作された墓碑墓廟の図像の特質とその社会的背景を明らかにすることである。前述のように、先行研究においては中部イタリアで 14~16 世紀に作られた墓碑の分類と社会学的な観点からの調査研究や、騎馬像型の墓碑など特殊な形式の墓碑について論じられているが、北イタリアの宮廷文化という地域性、時代性を考慮した調査は不十分である。そのため本研究では、15 世紀北イタリア諸宮廷の葬礼美術に着目し、特にリミニとミラノにおいて制作された作品について、その図像の特質と社会的背景を明らかにすることを目的とした。リミニやミラノでは、墓碑と同時期に制作された墓廟聖堂が併せて現存していることから、二つの関係性に着目することで、北イタリアの墓碑墓廟の美術史的位置づけや、図像構成の独自性を浮き立たせることが出来るためである。具体的には現存する作品の造形表現の特質や図像コンセプトを解明し、図像構想における都市間の相互刺激、君主間の政治的関係の墓碑墓廟の造形への影響を明らかにする。社会的、文化的、宗教的背景と図像との関係を明らかにする。北イタリア宮廷の墓碑墓廟の図像の特質を、家系の記憶の形成という観点から明らかにする、という 3 つの点を目指した。

3. 研究の方法

研究目的を達成するため、それぞれの項目に対して以下の方法を取った。

作品の造形表現の特質や図像コンセプトを解明するために、まず北イタリア諸宮廷(特にリミニ、ミラノ)の墓碑、墓廟の現地調査を通して、残存する墓碑と墓廟の数や形式、図像を確認した。また、それらの図像構想における都市間の相互刺激を明らかにするために、各都市の政治的関係を調査しながら、北イタリア内の諸作品の比較分析を行った。さらに、北イタリア宮廷における作例の特質や位置づけを明らかにするため、共和制のフィレンツェやヴェネツィアの墓碑墓廟、教皇の墓碑等と北イタリアの例との比較を行った。

社会的、文化的、宗教的背景と図像との関係を明らかにするために、まず、年代記や墓廟聖堂に関する一次史料の調査、分析を行った。修道会と君主の関係など、各都市で共通性が見いだせる部分を重点的に分析した。さらに墓碑墓廟を、明らかになった社会的、宗教的背景の中に位置づけ直すことで、新たな文脈から図像の再解釈を試みた。その調査や分析の方法については、バターフィールドのフィレンツェ墓碑研究や、場の機能や社会的背景に着目しながら墓碑彫刻の図像や形式、その配置を分析し、ヴェネツィアの総督墓碑を政治的プロパガンダとして読み解くことを試みたピンカスの墓碑研究(Pincus, D. (2000) *The tombs of the Doges of Venice*, Cambridge.)、ゴッフェンによるヴェネツィア、フラーリ聖堂の作品解釈のような社会的アプローチを援用した。

さらに、北イタリア宮廷の墓碑墓廟の図像の特質を、家系の記憶の形成という観点から明らかにするために、葬礼美術や年代記における家系図や君主の称揚図像を分析し、その影響関係や図像の特質を分析した。

イタリアにおける現地調査及び史料収集では、ミラノ(チェルトーザ・ディ・パヴィア修道院、スフォルツァ家、ヴィスコンティ家墓廟)、リミニ(サン・フランチェスコ聖堂、マラテスタ家墓廟)を中心として、イタリア各地の君主や権力者の墓廟の現地調査を行い、君主の各墓碑の残存数や形式と、それを擁する墓廟聖堂の装飾との図像的連関を調査した。また、年代記、伝記、弔辞、説教集といった史料や、家系図や葬礼儀式に関する情報を含む写本史料についての専門的な文献を、ローマのマックス・プランク美術史研究所等にて収集、調査した。

4. 研究成果

研究成果としては、特にリミニのマラテスタ家墓廟、サン・フランチェスコ聖堂（通称テンピオ・マラテスティアーノ）の装飾について、聖堂内の墓碑と装飾図像を家系の記憶の形成という観点から再考し、図像構成の着想源として14世紀にナポリ宮廷において制作されたアンジュー家の墓碑群や、ペトラルカによる墓碑銘からの影響、またロベール・ダンジューのために制作された『王国頌詩』における君主称揚図像との関連を新たに指摘した。

分析においては、まず一次資料に基づいて施主シジスモンドの墓碑構想の変遷を再検討し、本聖堂が墓碑の配置や図像の主題選択によって史観を構成して家系を記憶する場を作り出す、複合的記念碑となっていることを確認した。その上で他の王侯墓碑との比較考察を行い、本聖堂の構想における14世紀ナポリのアンジュー家墓碑群およびペトラルカによる墓碑銘からの影響、また『王国頌詩』における君主称揚図像との関連を指摘した。それによって、本聖堂の装飾がこれまでに指摘されてきたような新プラトン主義思想のみならず、ナポリにおける墓碑での家系の顕彰や君主称揚の方法からの影響の上に形成されていることを明らかにした。さらにそのような墓廟聖堂における家系の顕彰の方法が、北イタリアの君主の墓廟の装飾に与えた影響を指摘することで、サン・フランチェスコ聖堂を葬礼美術の系譜の中に位置づけ、評価するとともに、15世紀後半の北イタリアの葬礼美術の図像の特徴の一端を明らかにした。

成果の発表については、10月にまず同志社大学人文科学研究所第16研究10月例会において「15世紀北イタリア墓碑彫刻における家系の顕彰図像について」の口頭発表を行い、家系の記憶の視覚化という観点から北イタリアの君主や傭兵隊長の墓碑の構成や顕彰図像との比較考察を行った。特に、マラテスタ家墓廟サン・フランチェスコ聖堂の装飾図像における家系の顕彰の方法が、ミラノ近郊のパヴィア修道院やベルガモのコッレオーニ礼拝堂など北イタリアの墓廟の装飾に与えた影響を指摘することで、サン・フランチェスコ聖堂を葬礼美術の系譜の中に位置づけ、15世紀後半の北イタリアの葬礼美術の図像の特徴の一端を明らかにした。また、同じく10月に美学芸術学会第21回（於同志社大学）において「マラテスタ家墓廟テンピオ・マラテスティアーノ再考 記憶の場としての墓碑」の口頭発表を行った。本発表においては、マラテスタ家墓廟テンピオ・マラテスティアーノの構想における、14世紀ナポリのアンジュー家墓碑群およびペトラルカによる墓碑銘からの影響、また『王国頌詩』の君主称揚図像との関連を指摘した。それによって、図像構想における都市間の相互刺激、君主間の政治的関係の墓碑墓廟の造形への影響を明らかにした。本聖堂は聖堂装飾や墓碑の配置において史観を構成し、聖堂装飾の図像を墓碑装飾の図像と関連付けることで複合的記念碑を構成し、家系の記憶を視覚化している点で独創的であることが明らかとなり、それが北イタリアの墓廟に与えた影響が確認された。それらの論考を通して、本聖堂の図像を15世紀後半の北イタリアの葬礼美術の系譜の中に位置づけ再評価した。さらに、それらの発表に基づいて論文「マラテスタ家墓廟テンピオ・マラテスティアーノ再考 家系の記憶としての墓碑」（『社会科学』第49巻第1号、2019）を執筆した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

小松原郁「マラテスタ家墓廟テンピオ・マラテスティアーノ再考 家系の記憶としての墓碑」『社会科学』同志社大学人文科学研究所、査読有、第49巻第1号、2019

〔学会発表〕(計 1 件)

小松原郁「マラテスタ家墓廟テンピオ・マラテスティアーノ再考 記憶の場としての墓碑」第21回美学芸術学会大会、2018年10月27日、同志社大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。